
選ばれた魔法所有者たち

牧野 野牧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

選ばれた魔法所有者たち

【Nコード】

N2547Z

【作者名】

牧野 野牧

【あらすじ】

気づくと「魔法」が世間へと知れ渡っていた国、日本。魔法は今まで出来なかったことを可能にできる言葉通り「魔法」の力。しかし、この魔法は誰しもが扱えるというわけではない。魔法は選ばれた人間にしか使えないのだ。

選ばれた人間しか魔法が使えず、選ばれた人間こそが力を持つ国で、主人公”瀬波 優太”は一体何をするのか……？

1話 始まりと始まり

魔法こそが全て、魔法こそが国の、国民の宝なのだ！

世界には『魔法』が存在している。

それがいつから使われるようになったのかは誰も知らない。気づいたら魔法は世界中で使われていた。

しかし、それは一部の人だけに。

「おいしい！ いつになったら金返してくれるんだあ！？ ああん？」

高校生活二度目が始まるうとしている桜が満開の朝。とあるアパートには綺麗な桜吹雪と憎しみに満ちた怒声が、混ざり合うように空を舞っていた。

そんな中、俺こと瀬波^{せなみ} 優太^{ゆうた}は扉のドアノブを力一杯握り締め、ドアをこじ開けようとしている借金取りの男に抵抗していた。

「お前に貸してやった八千万円。まだ一円たりとも返して貰ってねーんだぞお！」

「お、俺はそんな大金借りた覚えねーよ！」

「あ？ 何とぼけてんだクソが！ おめーの父親が金貸せってますがり付いてきたから貸してやったんだろっが」

そう、我が家は今、借金を背負っている。

総額八千万円。どういう目的で借りたのかは詳しく知らないが、

知らぬ間に父親が借りていた汚い金だ。

父親は「俺が借りた金だ。だから俺が責任とって必ず返す。だから安心してくれ!」と、俺がまだ小さい頃から毎日のように俺に向かって、家族に向かって言うてきていた。

でも、そんなのはただの戯言に過ぎなかった。

返す金を手に入れる宛てすら無かった父親は、俺が中学の時、首を吊って自殺した。理由は自分が死んだ時に貰える保険金で、借金を少しでも返すため。

つまり、俺の父親は現実から逃げやがった。

でもそれだけで済めばよかった。それだけで済めば、まだ残った俺たち家族で、父親の代わりに借金を返せたのかもしれない。

しかし、俺の母親は……。俺の母親は、父親の保険金を持って俺のひとつ下の妹と一緒に姿をくらましてしまった。

残ったのは俺だけ。

それから今日に到るまでの約二年間。俺はただ逃げて逃げて逃げてきた惨めな人生を送ってきた。

年齢を偽ってバイトをし、なんとか生活できる程度のお金を手に入れる毎日。それだけだった。

家族が残していった借金を返そうにも、バイトで入るお金は自分が生きる分で精一杯だった。

だから住むところを転々とし、家賃も払わず、時には公園で野宿もしていた。

「おい! いい加減開けねーと痛い目見るぞ」

「じゃあ、俺がもし素直にドアを開けたら……?」

「殴るに決まってるだろーが、クソがああ! 仕方ねえ、これを使うか……」

どうすればいいんだよ。

よりによって今日は二回目の高校生活初日なんだぞ。

恐らく学校の方ではもう始業式が始まっているだろう。

……こういう時、俺が『魔法』を使えたら。

俺がそう思った刹那

ドンツ！！！！と、まるで車にはねられたかのような衝撃を俺は突然食らい、開けられないような体を張って抑えていたドア諸共部もろとも屋の一番奥まで吹き飛ばされた。

「　　っ！？　ゴホツゴホツ……」

ドアが盾代わりになってくれたおかげか、なんとか腹に鈍い痛みが生じる程度で済んだ。

それよりも一体今、何が起こったんだ？

もしかすると。

「ふんっ。これ使っと下手したら警察呼ばれるからあんまり使いたくなかったが……」

「……魔法か」

「その通りだ。俺は『選ばれた人間』なんだよ、さあ、とつと金返して貰おうか」

また魔法かよ……。

俺が必死に生き、必死に足掻いて暮らしている日本。ここは昔のように活気溢れる明るい国では無くなってしまった。

その原因が『魔法』。

世界で千人に一人。日本で五人に一人が使えると言われている魔法。

決して多くはないが、それでもかなりの人数が魔法を使える世界。そんな中俺は生きている。

魔法を使える者は世間から『選ばれた人間』と言われ、明るい将

来になると絶対的な約束をされるほどだ。

そのせいか選ばれた人間と選ばれなかった人間には、大きな壁が生まれてしまった。

例えばバイトでもそうだ。魔法を使える奴と使えない奴とでは時給が違う。ひどいところでは三百円くらい違う。

そう考えると、魔法を使えない奴に国は「ひいき」をしているように見える。が、それは少し違う。

そのひいきを帳消しにするため、国は色々なことをしているのだ。最もわかりやすい例を挙げると学校。

魔法を使える奴が通う学校は授業料などが掛かる。しかし、魔法を使うことができない奴が集まる学校は授業料などがすべて無料なのだ。

それはなぜか？ 理由は簡単。

国が同情しているからだ。

「魔法が使えない人達は将来過酷な思いをするかもしれない。せめて学校生活はそれなりに楽しんでもらおう」と、国からの哀れみを受け、今俺はそのおかげで何とか高校生活を送っていた。

しかし、俺はそれでも心のどこかで『選ばれた人間』に嫉妬しているのかもしれない。

ただ生まれ持ったというだけで将来が約束される人生……。

……何もしていないのに家族に捨てられ、逃げ続けた俺は周りから見たらどう思うんだろうか。

「何さつきから一人でブツブツ言ってんだ？ 言い訳でも考えてんのか？」

……愚痴を言っている場合でもないか。

俺はふと家具も何も無い部屋を見渡した。

出口はさつきドアを壊された入口と俺の後ろにある窓。でもここは二階。低そうで意外と高い。

(……飛び降りるしかないよなあ)

「おら、俺の魔法が直撃するのが嫌ならさっさと金出せ、金！」

だから出す金が無いつてさっきから言ってるじゃねーか。

俺は背中にぴったりとつけていた窓を振り向きざまに開け放ち、そのまま二階という高さから地上までジャンプした。

うまく着地

というわけにもいかず、地面に着地した瞬間、両足にどっしりとした痛みが走り、情けなくも地面へ倒れこむように着地した。

「ちっ……。手間かけさせんな」

男は俺の行動を薄々予想していたのか、俺に向け軽く舌打ちをした後、恐らく一旦階段を下りて俺を追いかけるために俺のいた部屋から姿を消した。

その隙に俺は少しでも逃げるべく、ずきずきと痛む足を無理やり動かし、とにかくどこでもいいから逃げるため走った。

とりあえず男が消えるまで公園で隠れているしかない。はあ、始業式の日こんなところで何してんだよ、俺。

隠れる場所がある公園へ向かうべく、ただただ走り続けた。もう少しで公園に着く。今はヤツから隠れることが第一だ。アパートの方にはあとで大家おやさんに謝らないとな。

ゴッ！！！！！

突如、俺の体に嫌な音が響く。嫌な音が響くと同時に、俺の体はそのままガクンと力が抜けたように地面へと崩れ落ちた。

そしてその瞬間、俺の右足はありえないほどの激痛が襲ってきた。痛い、痛い痛い痛い。黒光りしたアスファルトの上を転がり、痛みに堪えつつも激痛のした右足を確認した。

「……また魔法かよ。クソッ」

右足を見るとふくらはぎに手のひらサイズの石が皮膚に食い込んでいた。……どつりで痛いわけだ。

「ったく。逃げなければ痛い目に合わずに済んだのにな」

男は余裕の表情で俺にゆっくりと歩み寄ってくる。

その右手にはまた別の石を持っている。

「お前は『選ばれた人間』じゃないからわからないよなあ。何が起こったのか」

「……………」

「俺は手に振れた物、振れている物を弾き飛ばすことができるんだよ。こんな風になあ！」

そういうと、男は持っていた石を俺に向かって投げしてきた。

この程度なら避けれる！

さっき俺が食らったのは石が飛んでくるのを予想にもしていなかったからだ。

でも今度は違う。ヤツが投げた瞬間に体をひねって避ければ

ゴッ！！！！

ヤツが俺に向かって石を投げた瞬間、その石は目に見えない速さで俺の左肩を深く抉^{えぐ}ってきた。

同時に俺に声が出ないほどの激痛が襲ってくる。無意識のうちに右手で左肩を抑え、道のと真ん中で無様に倒れ込んだ。

「フハハハ！ おいおい、まさか避けれるとか馬鹿なこと思ってた

のか？ ふん。魔法を使えず神に見捨てられた奴が、俺の魔法が避けれると思つてんのか？」

「だ……まれ。魔法なんて、ただ運が良かっただけだろ……」

「ああ？ んだと」

道端に倒れ、動かない右足と痛みで小刻みに震えている左肩を押えている俺に、男は俺の目の前に立ち、俺の髪の毛を無理矢理引つ張ってくる。

「魔法が使えるのが運が良かったから？ 別にいいじゃねーか。お前のような魔法が使えない人生の負け組よりはよっぽどマシだ」

「……………」

「さあ、早いとこ金を返して貰おうか と、言いたいと

ころだが。どうやらお前は本当に金が無いみたいだな」

「ああ……だからもう今日は」

「見逃すと思つてんのか？ ふざけんな！」

男は俺の髪を掴んだまま、もう片方の手で俺の顔面を数回殴ってきた。

俺は抵抗することもできず、地面に血を垂らし、口の中に血の味が広がっていく。

「こつちはもう二年以上待ってやってんだぞ！ もうこれ以上は待てねえ！ 今、家にはお前しかいないみたいだな」

「……………」

「お前は今から俺の貸した八千万円をこの俺に返すまで、一生俺の手として生き、働いてもらう。もちろん逃げれると思うなよ。お前にはお前の父親に代わってこの俺の言いなりになってもらう。魔法が使えない奴は尚更だ。睡眠以外はずっと働き続けてもらうからな」

ちきしょう。

なんで、なんでいつも俺なんだ。

家族は俺を残し姿をくらませ、男は毎回俺の元へ来る。拳句の果てには今から俺は残りの人生をすべて亡き父親のために使わなければいけない。

ふざけんじゃねーよ……。

「今から俺がここへ車を持って来るまでおとなしくしとけよ。まあその手足じゃ動くどころか立つことも無理か」

そういうと男は、髪を掴んだまま俺を地面へと叩き投げ、一旦その場を去って行った。

もううんざりだ、こんな生活。

……魔法こそが全て？

……魔法こそが国の宝？

なんで人を傷つけるようなモノが国の、俺たちの宝なんだ。

なんでその『宝』を持っていない奴は、こつも『宝』を持った奴から侮辱されないといけないんだ。

間違っている。間違っているんだよ、この国は。

魔法なんて所詮道具だ。家にある冷蔵庫や洗濯機となんら変わらない。

それにも関わらずこの国は。

手足を襲う激痛に耐えながらなんとか体を起こすことができた俺は、ただひたすらこの世の中を否定していた。

思ってもいないことが、無意識のうちに次々と口に出てしまう。

何も思っていないのに、無意識のうちにどんどん憎しみが湧いてくる。そんな気分だった。

立つこともできず、ただぼーっと空を見つめっていると、こちらに向かつて走ってくる一台の車が目に入った。

……恐らくあの車がそうだんだろう。

……俺を永遠の地獄へと案内してくれる、憎しみの塊。
魔法は人を不幸にさせる。

現に俺は今、これから永遠に不幸な人生を送ることになるのだろ
う。

俺の方へとだんだんと近づいてくる車。

人を不幸にするもの。そんなものは。

「消えて無くなれ」

俺がそう口ずさんだ時、車はありえない形に変形し、大きな轟音
と共に爆風に包まれていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2547z/>

選ばれた魔法所有者たち

2011年12月9日00時53分発行